

TERAKKO通信
2012 Document



東京文化発信
プロジェクト



2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で！
TOKYO 2020
CANDIDATE CITY

はじめに

「TERATOTERA祭り2012」は「NEO 公共」というコンセプトを掲げました。東日本大震災後、「公共」は、私たちが自ら能動的に関わり、他者と共有すべき場や概念へと変わりつつあるのではないかと。小川希総合ディレクターのそんな問いかけから導き出されたコンセプトです。

これまでも「TERATOTERA祭り」の運営には、「テラッコ」と呼ばれるボランティアが参加していました。テラッコは年齢も職業も様々で、仕事や学業に携わりながらボランティア活動の時間を捻出しています。アートへの興味はあるけれど、アートプロジェクトの経験は乏しい。2012年度は、そんなテラッコたちが企画の発案から実施までを担うという方針が打ち出されました。

アートプロジェクトの担い手を実地体験を通して育成する。そんな狙いがあったのでしょうか。テラッコたちは方針転換に戸惑う暇もなく企画を立ち上げ、小川ディレクターの監修の下に、模索しながら次のような企画を実現させました。

中央線にゆかりのある文化人が「中央線文化」を語り合った国分寺でのトーク。高円寺の劇場のカフェに持ち込まれた奇想天外な音楽ライブ。阿佐谷の屋外プールを舞台にした映像作品の制作と上映。荻窪の旅館で哲学者らとともにボランティア活動の意味を考えたシンポジウム。営業中の飲食店や雑貨店で映像作品の展示を試みた「西荻映像祭」――。

いずれもテラッコたちの関心を映した企画です。作家や出演者への依頼や交渉、制作の補助、会場探しと交渉、そして当時の会場運営からこの記録冊子の制作までをテラッコが担いました。しばしば難題に直面しながらも諦めることなく、むしろ嬉々としてアートプロジェクトに取り組む。その姿を見ていると、「TERATOTERA祭り」の最大の享受者は私たちテラッコだったのかもしれない、と思えてきます。アートプロジェクトを介して、様々な人々やものごとと関わる。その歓びがテラッコたちの原動力だったのでしょう。

その一方で、「NEO 公共」というコンセプトをどれだけ深化させられたのか、という問いは残ります。それぞれの企画は地域の人々や鑑賞者にどのように受け止められたのか。テラッコたちは眼前の実務的な作業に追われるばかりで、コンセプトについて語り合う機会は少なかったのではないかと。いや、公共的な空間での展示やライブ、「ボランティア」や「中央線文化」といったテーマ設定には「NEO 公共」への志向を秘かに宿していたのではないかと……。会期を終えた今も、自問は尽きません。

喩えていえば、「NEO 公共」というコンセプトは遠い空に瞬く導きの星だったのでしょう。震災後の荒海にもまれながらも、テラッコたちはその星を目指して航海を続けた。いささかロマンチックに過ぎるかもしれませんが、そんな光景を思い浮かべています。

最後になりましたが、「TERATOTERA祭り2012」に参加してくださったアーティスト、出演者、会場を提供してくださった方々、来場された鑑賞者をはじめすべての関係者に感謝を申し上げます。皆様のご協力によって、私たちテラッコの企画を実現することができました。

2013年も、テラッコたちの航海は続きます。

(TERAKKO 西岡一正)



Guest


柏木 博 KASHIWAGI Hiroshi

1946年兵庫県生まれ。デザイン評論家。武蔵野美術大学教授。国分寺市在住。近代社会と人々の意識や思考、感覚を解説することをテーマに、デザインを中心に幅広い研究を続ける。著書に『近代デザイン史』（2008年、武蔵野美術大学出版局）、『モダンデザイン批判』（2002年、岩波書店）などがある。


穂村 弘 HOMURA Hiroshi

1962年北海道生まれ。歌人。西荻窪在住で、「西荻ブックマーク」など地元のイベントにも協力している。著書に歌集『手紙魔まみ、夏の引越し（ウサギ連れ）』（2001年、小学館）、短歌入門書『短歌という爆弾』（2000年、同）、エッセイ『君がいない夜のごはん』（2011年、NHK出版）など。『ほむらひろし』名義で絵本の翻訳を手がける。


西 加奈子 NISHI Kanako

1977年、イラン・テヘラン生まれ。エジプトのカイロ、大阪で育つ。小説家。2006年から約4年間、中野に在住。『あおい』（2004年、小学館）でデビュー『通天閣』（2006年、筑摩書房）で織田作之助賞受賞。

TERATOTERA WEST 途中下車の旅11@国分寺

「中央線文化」のきのう きょう あす

柏木 博(デザイン評論家) × **穂村 弘**(歌人) × **西 加奈子**(小説家)

平成24年6月30日(土) | 国分寺・カフェ スロー

TERAKKO国分寺チーム | 西岡、東、前川、千葉、高橋、藤岡、吉田萌、秋葉

東京文化発信プロジェクトの一つとして、中央線の沿線地域でアートや音楽、ダンスなど様々なアートプログラムを展開する「TERATOTERA」。3年目の今年は、従来の高円寺ー吉祥寺間の地域から国分寺まで「延伸」して、三つの「TERA(寺)」を結びます。そのキックオフとなるイベントが、6月30日に国分寺で開催された「TERATOTERA WEST 途中下車の旅11@国分寺」です。「中央線文化」のきのう きょう あす」をテーマに中央線ゆかりのゲスト3人が語り合いました。

2012 vol.01



テーマの「中央線文化」は耳慣れない言葉かもしれませんが。中央線沿線には、戦前には「阿佐ヶ谷文士村」と呼ばれる作家・井伏鱒二らを中心とした文化人の集いがあり、現在も文学者や漫画家が多く暮らし、アニメスタジオなども集まっています。そうしたことから醸し出される文化的な雰囲気や風土、あるいは「中央線人」とも呼ばれる沿線住人の気風などが、「中央線文化」という「補助線」を引くことで浮かび上がるのではないかと。そんな期待をこめて今回のトークは企画されました。ゲストは、デザイン評論家で武蔵野美術大学教授の柏木博さん、歌人で絵本の翻訳も手がける穂村弘さん、そして小説家の西加奈子さんです。会場はオーガニックな食材をゆったりとした空間で楽しめる「カフェ スロー」。いかにも「中央線的」な雰囲気のトークに、定員の80人を超える観客が詰めかけました。

トークはゲストに中央線との縁を語っていただくことから始まりました。

柏木さんは1946年神戸の生まれですが、幼少期から現在までほとんど国分寺・国立エリアで過ごされています。その経験から「中央線沿線の街には、荻窪、吉祥寺などに闇市があり、その記憶が強く残っています。立川の駅前などは恐ろしいほどでした。デヴェロッパーがほとんど入っていないので、駅前がすごくごちゃごちゃしている。それがかえて街の魅力になっている」。

西さんは1977年テヘラン生まれで、大阪育ち。作家を目指して上京されて間もなくは、下高井戸に暮らして渋谷のバーでアルバイトしていました。「その採用面接で、経営者に『中央線のやつは採らない』と言われて、東京にはとんでもない差別があるのかと思った」という発言に会場は爆笑。「でもしばらくいると『中央線って、こういうことか』とわかってきました」。その後、約4年間、中野に在住。「住みやすく、飲んべえにはたまらない街ですね」。

穂村さんは1962年北海道生まれで、大学生のころ、実家があった埼玉から西荻窪や吉祥寺によく遊びに来ていたそうです。「漫画家の大島弓子さんが作品の中で『吉祥寺は自分にとって最高の街』と書いていたので、それが刷り込まれていた。中央線の駅を一個ずつ降りてはどきどきしていた。中央線は非日常体験だったんですね。8年前から西荻窪に在住。「念願だったのですが、でもずっと住んでいたいのかというと、迷うところもあって……」。屈折した語り口にも「中央線的」な響きがあります。

そうした「中央線的なもの」はどのように形成されたのでしょうか。

柏木さんは作家・井伏鱒二の『荻窪風土記』に言及されました。「井伏は昭和の初め頃から荻窪に暮らしました。その回想記が『荻窪風土記』です。井伏の周囲に太宰治や青柳瑞穂といった文士たちが集まり、『阿佐ヶ谷文士村』と呼ばれたりしましたが、何をやっているかというところ、将棋をさしてお酒を飲んでいただけ。鎌倉の文化人とはかなり違って、飲み屋や喫茶店など街の人々となじんで、大衆的な生活をしていたことがわかります。そうした師弟関係で、物書きのネットワークがつくられていったのではないのでしょうか」。

穂村さんは「中央線沿線には、現在も物書きの知り合いがやたら住んでいるのは事実ですね。三鷹には芥川賞作家が7人も住んでいるそうです。新しく知り合う人が中央線沿線に住ということも多い。たまには目黒とか違った地域の人と知り合いたいのですが……」と苦笑します。この発言を受けて、西さんも「確かに、知り合うと『あ、この人も中央線なんや』ということが多いです。中央線にはなんか妖怪じみているというか、独特の力があるというか、変わった人が多いというイメージがありますね」。

話題は「中央線文化人類学」的な様相に。

穂村さんの観察に耳を傾けてみましょう。「西荻窪で驚いたのは、歌を歌いながら自転車に乗ってる人とか、おにぎりを食べながら歩いている女性。脇の下に小型犬を2匹抱えて歩いている人とか。そういう、やや逸脱した人、僕も含めてざりざりアウトミないな人をよく目にします。お互い許し合ってるんでしょうね」。

「女性のファッションでもエスニックな柄とか、体の線が出ない服を着ているときに『中央線ばい』っていわれます。女性らしさを誇らないのかな」という西さんの感想に、穂村さんは「ハイヒール率は低くて、天然素材率は高いですね」。

ここから穂村節が炸裂します。

「美大生のように見える、年齢は美大生じゃない人とか、とてもよく語る女性と、おとなしく聴いている男とのカップルとかが多くて、女性の主体性が守られているエリアという感じがします」「僕には

名前のわからない巻き物などを身に着けてる女性が多いのですが、お洒落なエリアから西荻窪に打ち合わせにきた女性編集者は、とても憎々しげに『あのコは脚がきれいなのに隠してる』と言っていました」「中央線で見かける外国人は、恵比寿や青山と違って、目に自信がない」。

観客席では爆笑が続きました。

そこから、穂村さんは中央線を「高感度な負け組の街」と表現します。

「すごく呼吸しやすい。だけど、いつかここから出なくちゃという気持ちもある。でも中目黒に行くたびに呼吸がちょっとだけ苦しくなる。そんな微妙な空気感がある」。美大教授の柏木さんも「中央線には美大や美大受験生に実技を教える学校が点在していますが、そういう美術系の学校はいわば『敗者復活』の場。復活できない場合もあるけれど、敗者が集まる場としての中央線。それがいいと思う」。

西さんは「例えば『西荻窪に住んでる33歳、フリーター』と書くと全部伝わる。逆に『白金台に住んでる24歳のイケてる娘』は書きにくい」と、小説家らしい比喻で応えます。「負け組」という表現で、穂村さんが示唆したのは「メインストリームに対する違和感のゆるやかな共同体」というコミュニティーのあり方でした。「少数派がばらばらな価値観で住んでいるから、お互いにちょっとずつ許し合って棲息している。でもマイノリティーでない想像力は機能しない。そういう意味で、すべてがマジョリティーなら目に自信の力は宿るかもしれないけど、それは幻だという気がする」。

2012年の「TERATOTERA祭り」は「NEO 公共」をテーマとして展開します。言い換えれば、「3.11」後の社会を支える「新たな公共性」をいかに立ち上げるか。私たちの問いかけに、国分寺でのトークは「互いの違いを許容しながら営まれる共同体」という可能性を示唆してくれたのではないかと、と思います。

(TERAKKO 国分寺チーム 西岡一正)

20代女性、武蔵境在住。友人と来場。閉会後、カフェ スローで食事に間く。

中央線沿線が好きで、ずっと住んでいます。おしゃれな文化ではなく、何だか面白い人が住んでいたりとかいう所に惹かれてます。今日はそんな話や、私が知らない中央線文化のことが聞けて良かったです。途中でお客様が話し始めたりしましたが、そんなおじさんも含めて中央線らしくて、とても面白かったです。今後は、中央線の中でも見落とされがちな小さな駅でのイベントもお願いします。

30代男性、文京区在住。銀行にお勤め。ご夫婦で参加。

三人三様のお話は全て面白く、特に穂村さんが印象的でした。視点が非常にユニークでありつつ、的確で妙に説得力があり興味深かったです。中央線文化については、今回のトークを通じて、具体的な内容だけでなく成り立ちまで知る事ができ、地域に根付く文化が形成される過程の面白さを感じました。今後は特定の地域について深い知識を持った方、また日頃お会い出来ないような文化人のトークショーを希望します。

カフェ スロー店長、国分寺市在住。

中央線にまつわる、取り留めない雑談が延々と続いて、特に方向性も着地点も見えないまま時間を迎えて終わってしまった印象でしたが、お客さんもパネラーの皆さんも中央線を愛していて、そうやってわいわい語り合う事自体が楽しいということでしたら、それも良いのかなと感じました。

もし今後も一緒に何かさせていただく機会があれば、単なる会場レンタルではなく、もう一歩お互いに踏み込んでコミュニケーションをとって、土台となる認識やゴールを共有した上で、満足度・完成度の高いイベント作りをお手伝いさせていただいたら嬉しいと思います。



カフェ スロー | 東京都国分寺市東元町2-20-10
<http://www.cafeslow.com>

東京アート・デザイン計画とは？
「東京アート・デザイン計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結びつけることで、東京の多様な魅力を地域・市民の参加により創造・発信することを目的に、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bh-project.jp/artpoint>
TERAKKO「フランク」とは？
TERATOTERAの活動を企画運営するボランティアスタッフです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

TERAKKO 国分寺チーム 吉田萌

初めてTERATOTERAのイベントに携わらせていただきました。

タイトルは「[中央線文化]のきのうきょう あり」。

かつて、ジャズ喫茶やカウンターカルチャーに代表されるような「三寺」と呼ばれた文化が存在し、今もこの路線に根付いた独自の文化が生きている事を、今回初めて知りました。

ゲストの方々の、中央線沿線に存在する建物やそこで生活する人々のエピソードはどれもユニークで、また、その会話の流れの端々で「皆が許しあって生きている」という発言を聞きました。

何をユニークとするかは人それぞれですが、日常の中で、時にそのユニークな人や場面は、無意識のうちに「無かったこと」として扱われる事がある様に思います。

しかし、それを語るゲストの方々と、話を聞き、笑う会場の方々の眼差しは優しく、楽しそうです。

神奈川県在住の私にとって、中央線沿線はいつも賑やかな印象がありますが、そこに人が自然に集まってくる理由の一つを見ることができた気がします。

次回予告 | TERATOTERA WEST 途中下車の旅12@武蔵小金井

納涼の音 [のうりょうのね]

TERATOTERAが、昔ながらで新しい夏の一夜をお届けします。

今回は、日本に古くより伝わる「納涼」という文化に注目した音楽イベント。歴史的な街並みを再現した野外博物館「江戸東京たてもの園」に2組の電子音楽家が登場します。懐かしい風景と現代的な音楽が互いに交わり、それぞれに新たな魅力や視点が生まれることでしょう。音を聴くということの、さまざまな工夫があった時代を振り返り、音楽の、夏の、その環境の楽しみ方を提案します。



日時 | 平成24年8月5日[日] 18:00-20:00

会場 | 江戸東京たてもの園 [小金井公園内] よしのけ 吉野家

観覧料 | 江戸東京たてもの園 入園料

出演アーティスト | 宮内優里、aus+takcom [w.Twigs & Yarn]

詳しくはウェブにて: <http://teratotera.jp>

お問い合わせ | TERATOTERA
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 Art Center Ongang(内)
tel: 030-4737-4798 | e-mail: info@teratotera.jp | <http://teratotera.jp> | <http://twitter.com/teratotera>
主催 | 東京都、東京文化発信プロジェクト(公)公益財団法人東京歴史文化財団(一)、一般社団法人 TERATOTERA
協力 | カフェ スロー、株式会社 skylink



TERATOTERA WEST 途中下車の旅12@武蔵小金井

納涼の音

アーティスト | 宮内優里・aus+takcom [with Twings&Yarn]

平成24年8月5日(日) 18:00-20:00 | 江戸東京たてももの園 よしのけ 吉野家

TERAKKO 武蔵小金井チーム | 竹内、森、高村、加藤惟、加藤志穂、宮久、外山

「TERATOTERA」は、東京文化発信プロジェクトの一つとして、中央線の沿線地域でアートや音楽、ダンスなど様々なアートプログラムを展開しています。今年2回目のイベントは電子音楽のライブ「納涼の音」。8月5日に武蔵小金井の「江戸東京たてももの園」で開催しました。

「江戸東京たてももの園」は歴史的な建造物を保存する野外博物館です。今回のライブは、江戸時代の古民家を会場に、2組の電子音楽家を迎えて、日本の懐かしい風景と電子音楽が響き合う不思議な空間を作り出しました。

2012 vol.02

古民家と、電子音楽。

電子音楽というと、先端的な電子機器を駆使し演奏される、無機質な音楽というイメージがあるのではないのでしょうか。そんな現代的な音楽と、暮らしの記憶をとどめる古民家の空間の出会い。それを体感することで、音楽への新たな視点が生まれるのではないか。そんな期待を込めて今回のイベントは企画されました。

当日、江戸東京たてもの園では毎年恒例の夏祭り「たてもの園下町夕涼み」が開催されていました。祭りのテーマは「昭和30年代」。盆踊り、屋台、歌謡曲など昭和30年代の夏祭りの情景が再現されていました。

当日は雲一つない晴天、最高気温33℃。うだる様な暑さで、かき氷の出店の前は浴衣姿の女の子や子供で常に賑わっていました。

ライブの客席は吉野家の園側に面した庭。地面に数十枚のゴザが敷かれ、ますます昭和の雰囲気が漂います。日が陰り始め、ヒグラシが鳴き始めた頃、観客が三々五々会場に集まり、ゴザの上に座ります。ライブ開始の時間にはゴザは観客でぎっしり。庭を囲む木立の間も立ち見の観客であふれていました。

午後6時。夕映えが残るなか、基平姿の宮内さんが登場し、ライブが始まりました。

宮内さんはエレクトロニカと呼ばれる音楽の演奏家。生楽器と電子楽器を一人で操り、様々な楽器の音をその場でサンプリングし、重ね合わせていきます。その演奏は、いわば“音の実験室”です。今回は当日のテーマである昭和30年代をイメージして、やかんと茶筒の音もサンプリングされました。

鍵盤の前に座った宮内さんがフレーズを重ねていきます。重なっていく音、ループするフレーズ。ふわふわと心地よい音楽が流れ出ます。そのうち、会場のどこ



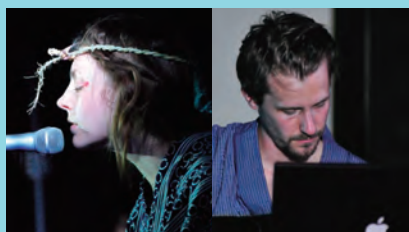
会場は、江戸時代後期に建てられた「吉野家」という古民家。吉野家は江戸時代に野崎村（現在の三鷹市野崎）の名主を務めた家と伝えられます。玄関には式台があり、奥座敷には付け書院があるなど、格式の高さをのびせます。



宮内優里 | 音楽家。1983年生まれ。これまでに5作品のアルバムをRallye Labelよりリリース。今年6月発売の最新作「トーンアフタートーン」ではゲストプレイヤーにCorneliusこと小山田圭吾氏が全面参加。ライブではアコースティックギターを中心に様々な楽器の音をその場でサンプリングし、たった一人で演奏する「音の実験室」といふべき空間を表現する。



aus+takcom | エレクトロニック・ミュージックをベースとしながらも、人肌を感じさせるような暖かいサウンドと、緻密かつ大胆なビート・メイキング、透明感溢れる美しい旋律に彩られた個性的な作品の数々を発表しているaus。そして大注目の映像作家takcomによる先鋭的なパフォーマンス。昨年末のカウントダウンイベント「ELECTRONIC TRIBE」にFRANCOIS K. DJ Kentaro, Y.Sunaharaらと共に出演。



Twigs & Yarn | Lauren McMurrayとStephen Orsakによるテキサス出身の男女ユニット。様々なハンドメイドの楽器をパッチワークのように紡ぎ合わせ、まるで夢の中の音を聴いているような美しいサウンドを作り出す。The Booksとして活躍するNick Zammutoも絶賛するデビューアルバムが、今秋ausの主催するflauよりリリースされた。



から小さな男の子が出てきました。客席の最前列で音楽にあわせて踊り始めると、会場には微笑が広がりました。小さなダンサーの登場で、宮内さんは予定していた曲から急遽踊りやすい曲へと変更。夏の夕暮れに優しく重なっていく音と、宮内さんの暖かな歌声。小さなダンサー。セミの声と通り抜ける夜風。古民家にゆっくりと流れる時間と相まって、会場は終始ピースフルな雰囲気があふれていました。

すっかり日が落ち、暗くなったところに繊細な電子音楽を奏でるausと自作ソフトウェアからソリッドな映像を作り出すtakcomのユニットaus+takcomの演奏がスタート。この日はたまたまジャパンツアーでテキサスから来日していた、様々な楽器を操りオーガニックなサウンドを紡ぎだす二人組Twigs&Yarnが特別参加しました。古民家の襖にはtakcomのVJによる映像が投影され、ausの奏でる鍵盤の音と同期して色鮮やかな映像が躍動。鍵盤の音と、どこか懐かしいようなザラザラとしたノイズにTwigs&Yarnのウィスパーボイスが重なり、アンビエントな空間が広がっていきます。後半、線香花火が燃え尽きるような音と鍵盤とストリングスが響きわたり、会場は、無限に広がる宇宙空間に吸い込まれていくような感覚に包まれました。

(TERAKKO 武蔵小金井チーム 外山智恵)

アーティストインタビュー

実は最近、僕は思うように音楽が出来ていないと少し悩んでいるところもあったのですが、今回のライブ中にはそんな悩みがペリペリ剥ぎ取られていくのを強く感じました。いちと君（飛び入りで踊った男の子）は短い時間の中で僕に色んなことを気づかせてくれました。僕の今までのライブの中でもベストライブだった気がします。僕が思う理想の空間を作れたように思います。基準とすべきものがやっと見つけられました。いちと君はもちろん、お客さんとみんなで空間を作れた。あの場にいたみなさんに感謝。..... 宮内優里

ロケーションも音環境も最高で、楽しい一日を過ごさせてくださいました。演奏していても、木々のざわめきやセミの鳴き声など色んな音が混ざってきて、すごく気持ちよかったです。ありがとうございました。

..... aus+takcom

小さなダンサーのお父さん。

ダンスをとくに習っているわけではないのですが、音楽は好きみたいです。音楽が鳴ると体が動くんでしょうね。普段はレディガガとかで踊っていますが、音楽ならなんでもいいみたいです。

今日はたまたま夕涼みにきたらライブをやっていて。近くで動いてたんですけど、どんどん吸い寄せられて行ってしまいました。

周囲に迷惑をかけない範囲で楽しんでいるときは、自由にリリースしたいんですが、今日は、ざりざりというか、申し訳ないです。宮内さんと場所の雰囲気にお任せしようと思い、見守っていました。彼のダンスを止めたくないなって思ってしまう。音楽もとてもよかったので。ほかのお客さんへ迷惑をかけることになるのでは、邪魔になるのでは、とちょっとこわかったのですが、自由にしていただいて、本当にありがとうございます。



江戸東京たてもの園 学芸員 高橋さん。

音楽イベントは今まで何回もやっていますが、電子音楽のライブは初めてでした。納涼の音というタイトルどおり吉野家を背景に、涼しげなイメージでした。こちらの意図をくんでいただいていたと思います。電子音楽はもっと派手なイメージの演奏を想像していたのですが、本当に静かな感じで、たてもの園の蟬の音とも融合していて非常に良かったです。途中で男の子が踊り始めたハプニングも、夕涼みの会ならではだと、たてもの園のボランティアさんたちも話していました。

TERAKKO 武蔵小金井チーム 外山智恵

「納涼の音」は古民家と電子音楽の組み合わせという、少々実験的な試みでしたが、400人の方が集まりました。夏祭りに訪れてたまたまこのイベントを知った観客も多く、日ごろ電子音楽に馴染みのない層にも楽しんでいただけたようです。Twitterでは「ぜひ来年も開催してください」と嬉しい感想もいただきました。

2012年の「TERATOTERA祭り」は「NEO公共」をテーマとしています。今までにない空間で音楽を体験する、今回のイベントは音楽と空間の新しい楽しみ方を提案できたのではないかと思います。

次回予告 | TERATOTERA祭り2012 前期 (高円寺・阿佐ヶ谷・荻窪・西荻窪)

TERATOTERA祭り2012「NEO公共」

『TERATOTERA祭り2012』は、2012年9月-11月にかけてJR中央線高円寺駅から吉祥寺駅区間の各駅周辺をリレー形式で移動しながら開催する大規模展覧会です。今年度のTERATOTERA祭りのメインテーマは『NEO公共』。震災以降の新たな公共性とはいかなるものかをアートの力を通じて探っていきます。展覧会の前期は、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、西荻窪がメイン舞台となります。音楽ライブ、屋外展示、シンポジウム、街中映像祭といった多彩な内容で各地域の魅力を引き出しつつ展開していきます。2012年秋、東京の西側で繰り広げられる表現の祭典、ぜひお気軽に足をお運びください。

◎高円寺「オープニングスペシャルライブ!!!」9月17日[月・祝] 開場 18:30 開演 19:00

要予約(予約方法はWEBにてご確認ください) | 出演者: core of bells | 会場: カフェ&レストラン アンリ・ファープル(座・高円寺2F)

◎阿佐ヶ谷「What happened on the pool?」9月22日[土]-9月30日[日]

アーティスト: 岩井優 | 会場: 阿佐ヶ谷やき公園プール ※JR中央線上り電車の左車窓から見る作品です。

◎荻窪「ボランティアをてがつくる!」9月22日[土] 開場 14:30 開演 15:00 | 要予約(予約方法はWEBにてご確認ください)

パネリスト: 鷲田清一、稲葉剛、磯部昌子、片山実季 | 会場: 旅館西郊

◎西荻窪「西荻映像祭 -TEMPO de ART-」10月3日[水]-10月14日[日]

8組の若手アーティストによる12日間の映像祭を開催致します!

詳しくはウェブにて: <http://teratoterajp>

東京アートイベント計画とは? 「東京アートイベント計画」は、東京の様々な人・まち、活動家・アーティストの力で、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目的に、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bh-project.jp/artport> TERAKKO(テラッコ)とは? TERATOTERAの活動企画から運営までアシストするボランティアスタッフです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

お問い合わせ | TERATOTERA
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7(Art Center Ongyōji)
tel. 090-4737-4798 | e-mail: info@teratoterajp | <http://teratoterajp> | <http://twitter.com/teratoterajp>
主催: 東京都、東京文化発信プロジェクト(東京都歴史文化財団)、一般社団法人TERATOTERA
協力: 江戸東京たてもの園、株式会社skylark



TERATOTERA祭り@高円寺

オープニングスペシャルライブ!!!

アーティスト | **core of bells**

平成24年9月17日[月・祝] 19:00-20:30 | カフェ&レストラン アンリ・ファープル (座・高円寺2F)

TERAKKO高円寺チーム | 東、外山、永野、竹内、秋葉

TERATOTERA祭り@阿佐ヶ谷

What happened on the pool?

アーティスト | **岩井優**

平成24年9月22日[土]-9月30日[日] | 18:00-20:00 | 阿佐ヶ谷やき公園プール

TERAKKO阿佐ヶ谷チーム | 脇屋、伊藤、加藤惟、范、加藤志穂、森

『TERATOTERA祭り2012』は、JR中央線の高円寺・吉祥寺間の各駅周辺をリレー形式で移動しながら開催する大規模な展覧会です。その開幕を飾ったのが9月17日に高円寺で行った「オープニングスペシャルライブ!!!」。次いで、22日から9日間、阿佐ヶ谷の屋外プールを会場に現代アートの作品展示プロジェクト「What happened on the pool?」を実施しました。



オープニングスペシャルライブ!!!

ライブの舞台は「座・高円寺」内のカフェ「アンリ・ファブル」。特定のジャンルに収まらない「core of bells」がどんなパフォーマンス繰り広げるのか。集まった観客は期待に胸を膨らませていました。

ステージはいたってシンプル。カフェのテーブルの間にドラムセットがあるだけ。ぱっと見た限りでは普段のカフェとあまり変わりありません。

19時の開演とともに始まったのは、メンバー5人による井戸端会議のようなトークです。話題は2003年の結成当時からその後の活動など。あっけにとられていた観客も、いつの間にか「core of bells」の空気に溶け込んでいきます。彼らの日常をのぞきみるようなトークに時おり笑い声もあがり、いたって和やかな雰囲気です。

そんななか、突如鳴り響く爆音。メンバーの一人ひとりから絞りだされるような音でカフェは一挙に、非日常に塗り替えられていくようでした。ところが音にのめりこみ始めた瞬間、演奏はピタッと止み、再びトーク。トーク、演奏、トーク、演奏……。カフェは次第に「core of bells」色に染まっていきます。そして、演奏が最高潮に達したところで、終焉へ。再現不能な、あつという間の2時間でした。

(TERAKKO 高円寺チーム 東晶子)

Kôenji



What happened on the pool?

いつも乗っている中央線車窓の見慣れた市民プールに、見慣れぬ美術作品があったら、通勤途中の会社員、通学途中の大学生や高校生が顔をあげる きっかけになるのでは。そんな思いから岩井優作品「Floating Life(浮いた生活)」は動き出しました。

中央線の車窓から見える屋外プール。こどもたちの声と蝉の音の重なりや入道雲に、季節の移り変わりを覚える光景も、携帯や新聞、雑誌やお化粧品に夢中な乗客の視界には入らない。見慣れたと思いつつも、違う見方を提示してくれる、美術を置いてみたら――。

そんな風に企画は始まった。生半可な構造体を浮かべたところで、風雨による破損の危険性と隣り合わせの9月の展示。作家は修復可能なプランとして、以前カンボジアで見た、水上生活者が水辺で洗濯をする日常の風景を、阿佐ヶ谷のプールで落水しながらも洗濯を続ける群像劇として撮影し、日々変化するインスタレーション作品を提案してくれた。

炎天下での設営、撮影中のゲリラ豪雨、苦勞して張ったスクリーンがちぎれて落水する絶望感も味わったが、幅広い世代で挑む撮影は一体感も生み、スクリーンを補強しては天気予報を脱む日々が続く。「車窓から作品見られました! 普段は車内で携帯ばかり見ているけど、視線を上げるって大切ですね!」とのtwitterへの反響が励みになった。

本編は15分程の映像も、車窓からではせいぜい3-4秒。全編を投影する特別上映会すら台風上陸で順延を余儀なくされた。十六夜の月を待って上映を開始すると、平日にも関わらず次々と来場者が訪れた。作品を囲むように思い思いの場所で作品に見入る人々で、気づけばプールサイドは埋め尽くされている。中央線の走る音、鈴虫の輪唱、羽衣のように風にひるがえるスクリーン、映像が発する胎動のような水中音、水面を渡る風が9面のモザイク状の映像と一体になり、一大インスタレーションが完成した。映像の放つ光にぼんやり照らされながら、息を詰めて作品に見入る人々の姿も本当に美しく、上映会の終わりを告げるのが心苦しくさえ思われた。

今、プールはいつもの姿を取り戻している。どれだけの人が目撃したかわからない光景が、車窓を見やるきっかけになっていることを祈るばかりである。

(TERAKKO 阿佐ヶ谷チーム 脇屋佐起子)

マイコさんとアキコさん(ともに20代後半の女性)

Q: 今回のライブはどうでしたか?

マイコさん: 面白かったです。初めて「core of bells」を見ました。

Q: きっかけは何ですか?

マイコさん: アキコさんに誘われて来ました。

アキコさん: 私は以前に、別のイベントで「core of bells」を見たことがあるのですが、それとはちょっと違ったパフォーマンスでした。むしろ、今回の方が面白かったです。

Q: 会場の雰囲気はどうでしたか?

マイコさん: 変わった場所で面白いと思ったのですが、普段ライブやる場所ではないから、ちょっとやりにくい所もあるのかな、と思いつつ見てました。

ハルミさん(20代前半の女性)

Q: 今回のイベントはどうでしたか?

面白かったですね。トークと音楽のギャップがあって、不思議な感じでした。会場もオシャレな雰囲気でした。

TERAKKO 高円寺チーム 東晶子

「core of bells」による「オープニングスペシャルライブ!!!」は、何が起るか予想が出来ないライブでした。メンバーが普通に雑談しているかと思いきや、突然激しい演奏が始まる。そんな奇想天外の演出に、お客様からは「大変面白かった」という声を聞きました。また、会場が高級感、清楚感ある空間だったので、最初はドラムセットやアンプがミスマッチのように見えたが、パフォーマンスが進むにつれて違和感がなくなっていたのも、今思えば不思議です。「TERATOTERA 祭り2012」のオープニングとして盛況に終わり、良いスタートが切れたのでは、と思いました。



core of bells | 2003年湘南で結成。カテゴライズ不能の自由極まりないサウンドと一見「非音楽」とも思えるアイディアでその音楽性を振るがす5人組。2010年にリリースした1stアルバム「ボトルキープ2010」や、FUJI ROCK FESTIVAL'10「ROOKIE A GO-GO」でのライブが話題を呼んだほか、ギタリスト・杉本拓との合作アルバム「gesupina2 -Lost Banchos-」のリリース、美術家・小林耕平とのパフォーマンスを収めたDVD「PRECIOUS TIME ONLY YOU」のリリース、ワークショップなど、その横断的な活動はほかに類を見ない。

杉並区文化交流課 山澤さん

シチュエーションがいいですね。シンプルな音と映像、動きのあるスクリーン、この全体的なフォルムが夜景にマッチしていて、まったく観られる作品だと思います。こういう試みてなかなかできないので、アーティストの方も限られた条件の中でやっていただいて、本当にありがたいです。近隣住民に配慮しなければならないのはもちろんですけど、今後できるだけチャレンジしたい。あっと思えるような企画というのは楽しみです。

来場者(30代男性)

水面下で起こっていることが水上に映し出されて、境界がないような不思議な感じがする。撮影の様子を電車から見ていて、四角い枠をプールにはって、なんかばしゃばしゃやっていると、思った記憶があります。公共というテーマは本当は震災前からもっと考える必要があったと思っていて、今回、台風で上映日がずれたにもかかわらず、公共施設が借りれたのはすごく意義があることだと思います。こういうことをどんどん発信していけたらいいですね。

TERAKKO 阿佐ヶ谷チーム 伊藤真希子

阿佐ヶ谷けやき公園プールを舞台とした「Floating Life(浮いた生活)」は、テラッコ以外にも多くの方にボランティアとして協力してもらった展示でした。

身体のしなやかさを活かし、映像作品をより引き立ててくれた人。9月のプールに飛び込む出演者のために、暖かい飲み物を用意してくれた人。映像投影のためのスクリーンが破れてしまった際、解決の糸口を与えてくれた人……。年齢も職業もバラバラな、多くのボランティアが実際に作家と言葉を交わしながら制作を進めることにより、不特定多数の観客にメッセージを訴えかける作品が完成したのだと思います。



岩井 優 | 1975年京都生まれ。2009年東京藝術大学美術研究科後期博士課程修了。博士(美術)。掃除やごみを作品に取り入れることで、現代の過剰な清潔志向を過度にサイクルさせて見せ、アンチテーゼを示す。作品発表はインスタレーション、映像、パフォーマンス、ドローイングなど多岐に渡り、海外での作品制作にも意欲的に取り組みながら活躍の場を広げている。主な個展に「slow, down」(Art Center Ongoing, 吉祥寺, 2011)、「袋小路のミューテーション」(3331 Gallery, 秋葉原, 2011)、「Dancing Cleansing」(タクロウソメヤコンテンポラリー, 新富町, 2011) 主なグループ展に「Tokyo Story」(トキョーワンダーサイト, 渋谷, 2011)、「テラトテラ祭り」(POST) (ハモニカ横丁, 吉祥寺, 2011) などがある。

東京アートバンク計画とは?
「東京アートバンク計画」は、東京の様々な人・まち・活動のアート活動を通じて、東京の多様な能力を地域・市街の参画により創造・発信することを目的に、「東京文化発祥プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.ubn-project.jp/artport>
TERAKKO「テラッコ」とは?
TERATOTERAの活動を企画・運営するボランティアグループです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

お問い合わせ | TERATOTERA
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 (Art Center Ongoing内)
tel: 090-4733-4798 | e-mail: info@teratoterajp | <http://teratoterajp.jp> | <http://twitter.com/teratoterajp>
主催 | 東京都、東京文化発祥プロジェクト(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人 TERATOTERA
後援 | 杉並区、荒川区、武蔵野市
協力 | 株式会社shylink, Takuro Soneya Contemporary Art, 株式会社ヒトリオン・デザイン・センター



TERATOTERA祭り@荻窪

ボランティアをてつがくする!

パネリスト 鷺田清一、稲葉剛、磯部昌子、片山実季

平成24年9月22日[土] 15:00-17:00 | 旅館西郊

TERAKKO荻窪チーム | 秋葉、大内、遠山、伊藤、吉田萌

TERATOTERA祭り@西荻窪

西荻映像祭-TEMPO de ART-

アーティスト 池田拓馬、泉太郎、奥田栄希、河地貢士、最後の手段
佐久間洸、林千歩、東野哲史

平成24年10月3日[水]-10月14日[日] | 10月6日[土] 18:00-19:30 アーティストトーク

開催店舗 | UNTIDY、nombre、omnivague、ZEN PUSSY、STORE、なずな屋、ハンサム食堂2号店、

常盤屋牛肉店、ワインとつまみ イトキチ、よね田、FALL、らあめん まる家

協賛 | 株式会社 シーマ・ラボラトリー、TAXAN

TERAKKO西荻窪チーム | 吉田絵美、高村、宮久、上野、伊藤、木俣、横井、林

『TERATOTERA祭り2012』の荻窪では、旅館西郊を舞台に「ボランティアをてつがくする!」と題したシンポジウムを開催。次の駅、西荻窪では「西荻映像祭-TEMPO de ART-」を駅周辺の12店舗で展開しました。



ボランティアをてつがくする!

なぜ、私たちはボランティアをしているのか?

私たちが自ら「TERATOTERA」のボランティア活動を顧みる中で抱いたこの疑問が、今回のシンポジウムのきっかけとなりました。文化として成熟し始めたボランティアの現在を捉えるため、哲学者の鷺田清一氏と、異なる分野で活躍する3人のボランティア経験者に語り合っていました。

会場は荻窪の「旅館西郊」。10代から70代の来場者70人を前に、パネリストの経験談を中心に現代のボランティアの特性について議論がなされました。

他人のための奉仕活動といったイメージの強いボランティアですが、パネリストに共通していたのは、ボランティアは自分のためにしているという認識でした。現在の状況に対する違和感や自らの切迫した感情が、活動の原動力になっているようです。その意味でボランティアは自己実現のための営みと言えるかもしれません。

一方でボランティアは多くの場合、集団で行うものです。集団で行動をシェアしながらワン・オブ・ゼムになること、そして自分の行動が全体の中でどう機能し、繋がっているのかを確認できたときにやりがいを感じることができるのではないかという発言がありました。また、現代の消費社会の中で外部サービスを楽しむだけの「客」としての生活から抜け出て、市民の一人として社会に関わりたいという潜在的な想いが、人々をボランティアに駆り立てているのではないか、という意見も示されました。

そして話題は、ボランティアが築く人間関係へと広がりました。仕事における人間関係で重要な、地位や年齢、性別といった属性もボランティアでは意味をなさず、ボランティアはみな、属性を取り除いて認め合う関係にあること、ボランティアは職業人としての自己が解体されて、自分の所掌範囲を広げる経験となるといった指摘もありました。このような緩い繋がりの中で楽しくシェアしていたボランティアでも、活動を継続する中で、組織としての問題が露呈してくる、とパネリストの方々は語ります。有給化による活動の格差、それに伴うヒエラルキーの発生。分担がいつしか分業になり、組織の論理に飲み込まれていく。活動が拡大するにつれてボランティアたりうる条件が露呈してくると、ボランティアの限界が指摘されました。終盤には来場者から質問を募り、ボランティア活動に対する想いや悩みを共有しました。なぜ、私たちはボランティアをしているのか。その答えは今回のシンポジウムでは明らかにはならなかったように思います。しかし、その問いには正しい答えなどないのかもしれませんが。重要なのは答えを求めて問い続けることなのではないかと思うのです。今回のシンポジウムがボランティアのみならず、それぞれの人生について今一度考えるきっかけとなれば幸いです。

(TERAKKO 荻窪チーム 秋葉大介)



西荻映像祭 -TEMPO de ART-

JR中央線沿線の中でも、のんびりとした独特な“テンポ”が息づく西荻窪。この街で平成24年10月3日から14日まで「西荻映像祭 -TEMPO de ART-」が開かれ、古書店や雑貨店、飲食店など12の店舗を若手アーティスト8組の映像作品が彩りました。参加アーティストは、池田拓馬、泉太郎、奥田栄希、河地貢士、最後の手段、佐久間洸、林千歩、東野哲史。その時・その場所でしかありえない、映像一空間を体感した12日間でした。

「西荻映像祭 -TEMPO de ART-」は、独特のカラーを持つ地域に現代アートがどのように関わられるかを探るとともに、アート作品の鑑賞者が会場となった店舗を巡ることで、西荻窪ならではの魅力を発見する場を作りたい。そんな思いから企画されました。

会期中、街にはさまざまな映像が出現しました。ワイン居酒屋の窓には、西荻窪に「降臨」したヒンドウ教の神ガネーシャの姿が映し出され、雑貨店のウインドーでは、配線むき出しのブラウン管から「ちくびコレクター」という映像が深夜まで流れ続けました。閉店後の精肉店のシャッターに流れる映像は帰宅途中の通行人の足を止め、街にはいつもとは違う“テンポ”が吹き込まれました。

参加アーティストの一人が、こんな感想を口にしました。「作品の中に作品を置くような感じがした」。全ての店舗が個人経営だったため、店主の作品への関わり方もそれぞれ。撮影に協力し映像にまで登場する人がいる一方で、想像したものと違ったという人も。店舗にアート作品を展示するのは、店主が何年間も守り抜いてきた場所や時間に足を踏み入れること。そのためには、まず人と人との関係を築くことが必要でした。今回のTERATOTERA祭りのテーマにも掲げられていた“公共”は、単なる群衆ではなく、人間としての関係性を持った個人の集まりであるということを改めて実感しました。

西荻映像祭の来場者数は2,000人を超えました。この街に暮らす人や訪れた人たちに、何かひっきりのあるものとしてアートを発信できたのだろうか、という自問は今も抱き続けています。アートが社会や経済からかけ離れてしまっている現実を見せつけられた気もします。アーティストが社会と関わりながら自己発信できる場、そして個性のぶつかり合いによって様々な人が日常の視点を考え直す場を、継続してつくっていけたらと思います。

(TERAKKO 西荻窪チーム 高村瑞世)

来場者インタビュー | 50代男性

地味なテーマでしたが意外に面白かったです。経験に裏打ちされたコメントが沢山あって勉強になりました。

鷺田さんの発言の中に今僕が考えていることのヒントがいくつかありました。

例えば「ワン・オブ・ゼムと感じられるからボランティアは面白い」という話。「ワン・オブ・ゼム」って悪い意味で使うことが多いと思うけれど、ボランティアではそれを肯定的に感じられる、というのはどう考えていったらよいのか。

あと「ワークライフバランス」。賃労働以外にもパブリックな要素があって、それも含めた生活でなくてはならないんじゃないかという指摘はその通りです。裏を返すと、経済が成長していた頃は賃労働がパブリックな要素を持てた。道路が出来る、貧困がなくなる、必要なダムが出来る、あるいは民間企業で商品を作ることでパブリックでありえた。おそらく今、民間企業で働くことがパブリックな意味を持つことを感じづらくなっているんじゃないか。だから、パブリックなことに関心のある人がボランティアをするんじゃないかなと。この問題も興味深いので考えていきたいと思います。

TERAKKO 荻窪チーム 大内綾香

今回のシンポジウムでは、活動分野の異なるパネリストの方をお招きしましたが、それに呼応するように、当日は幅広い年齢層の方にお越しいただきました。

「ボランティアをてつがくする」というテーマで展開しましたが、異なるジャンルから共通項を引き出すことはなかなか難しく、現代のボランティア活動のあり方が実に多様であり、その関わり方も個人の数だけ存在すること、一括りにはできないことを改めて感じました。

わたしたちTERATOTERAのボランティア(TERAKKO)の多くは、アートへの興味を出発点に、他に仕事を持ちながら各イベントの開催に向けて活動しています。仕事ではないからこそ、この活動への関わり方が、アートに対しての自分の思いは何か、またこの分野の中で自分にできることは何か、というストレートな問いかけにつながりやすく、それが、いかに生きるか、(わたし)を生きるとは、という自分自身の生き方への問いかけにもつながっているのだと思います。今も、迷いながら学ぶ日々です。

omnivague店主 木間由一さん

アンティーク雑貨店「omnivague(オムニバグ)」では泉太郎の映像作品を上映した。実験的な新作が連日、即興的につけられ、上映作品は計5点となった。

私は現代美術に対しての許容に厳しくて、村上隆や奈良美智、Chin + Pomなど会田誠ファミリーの作品も受け入れるのに時間がかかったが、泉のアナログ感覚の作品は、バカバカしくも楽しくて、しかも深層を突いていたので、すんなり受け入れられた。若手新進作家の多くは、仮に100万円の予算を与えられてたら、別のモノをつくったんじゃないかな。でも泉太郎というのは、予算が100万円だろうと1万円だろうと変わらずに同じモノをつくる、そんな気がする。「現代美術」とは「やり続ける」ことだと感じました。

来場者インタビュー | 20代学生

どの作品も展示している店舗の雰囲気と調和していたので、ただ作品を鑑賞するだけでなく、何を扱っているお店なのかと店舗自体にも興味を持ちました。マップ片手に展示場所を探しながら街中を歩いているうちに、何だか違和感がある風景に急に気づく。不思議に思ってマップを確認するとそこが会場だった。偶然の出会いにも思えてしまうような、日常からちらっとのぞく「異物感」が非常に心地よく感じられました。

TERAKKO 西荻窪チーム 吉田絵美

個性的なお店が建ち並ぶ西荻窪に現代美術があったらどうなのだろう、という素朴な思いから企画した「西荻映像祭」。店舗は美術館とは違って展示のための空間ではありません。そこに美術を存在させることは、予想以上に冒険でもありました。ですが、いざ設置してみると店舗に馴染む作品もあり、違和感を醸し出す作品もあり……。普段とはひと味違った美術、また店舗の一面を見せることができたのでは、と思います。日常と美術が融合する場合は予測不可能であっただけに、不思議な12日間を体験できた気がします。

Ogikubo Nishi-Ogikubo

東京アートイベント計画とは？
「東京アートイベント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートを通じて、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目的し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bh-project.jp/artpoint>
TERAKKO(テラッコ)とは？
TERATOTERAの活動の企画から運営まで行うボランティアのアジアです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

お問い合わせ | TERATOTERA
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7(Art Center Ongakuji)
tel:090-4737-4798 | e-mail: info@teratota.jp | <http://teratota.jp> | <http://twitter.com/teratota>
主催 | 東京都・東京文化発信プロジェクト(公益財団法人東京都歴史文化財団)・一般社団法人TERATOTERA
後援 | 杉並区・武蔵野市
協力 | 株式会社skylink, ART FRONT GALLERY, 株式会社デジタルフロンティアセンター



TERATOTERA祭り@吉祥寺

TERATOTERA祭り2012 後期 NEO公共

『ART』・『MOVIE』・『シンポジウム-新しい公共へ-』・『まちプロ会議』

平成24年10月20日[土]-11月4日[日]

後期の舞台となったのは東京の西の拠点、吉祥寺。

老舗映画館“バウスシアター”での現代アーティストによる映像作品上映や、豪華ゲストを多数招いた二つのシンポジウムに続き、『TERATOTERA祭り2012』のフィナーレを飾ったのは、吉祥寺を象徴する憩いの場/井の頭恩賜公園をメイン会場とした2日限りの野外アート展でした。総勢12組のアーティストが、秋空のもとアート、ダンス、音楽など、観るものを魅了する表現を展開し、吉祥寺の新しい祭典となりました。

2012 vol.05

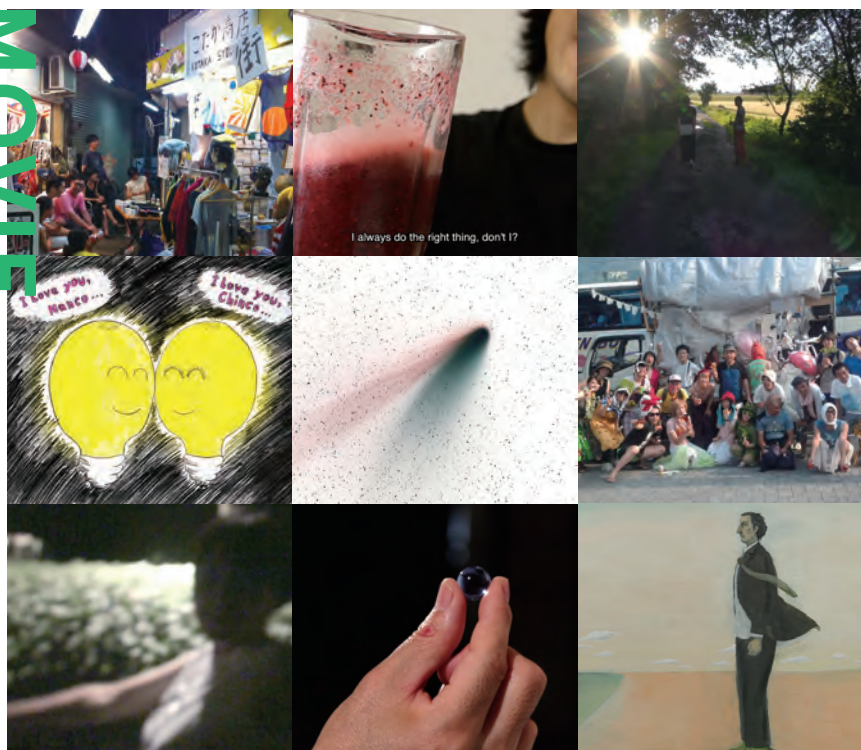


東京文化発信
プロジェクト

TERATOTERA × 東京アートポイント計画

2012 Vol.05-01
TERAKKO通信

MOVIE



NEO 公共『MOVIE』

平成24年10月20日[土] - 11月2日[金] 21:00 - | 吉祥寺バウスシアター

アーティスト | 岩井優、大木裕之、柴田祐輔、鈴木光、利部志穂、加藤翼

小鷹拓郎、山本高之、ALIMO、COBRA、Chim↑Pom

トークショー 10月21日[日] | 出演者=利部志穂、加藤翼、小鷹拓郎 司会=小川希

老舗映画館バウスシアターを会場に、現代美術作家の映像作品を14日間オムニバスで上映しました。「NEO 公共」をテーマに、11組の作家が独自の角度で作品に織り込んだ社会的メッセージを発信。Aプログラム、Bプログラムに分かれたレイトショーは、作家の個性が光る多種多様な表現を一度に見られる充実したプログラムでした。ご来場の皆様は映画館ならではの環境と内容で映像をじっくり味わっていました。(田中)



2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で!

TOKYO 2020
CANDIDATE CITY



TALK



NEO公共『まちプロ会議』

平成24年10月21日[日] 15:00-17:00 | 武蔵野商工会館4F ゼロワンホール

パネリスト | 松本哉(高円寺:素人の乱)、國時誠(西荻窪:西荻茶散歩)、小川希(吉祥寺:TERATOTERA)

TERATOTERAの活動地域において、それぞれの街にあったプロジェクトを展開している松本哉、國時誠、小川希による鼎談。三者三様に街の特色を活かすプロジェクトを行なっているだけあって、抱える悩みも大きく異なっていました。例えば、高円寺の商店街を盛り上げようとするプロジェクトに対し、吉祥寺でのプロジェクトは人が多く流れ込んでいる事を問題視すべきと考えているなど、正反対となる意見もありました。しかし3名とも共通して「店と店、人と人をつなぎ、自らの力で街の魅力を引き出したい」という思いがあるだけに、賛同する意見も多くありました。途中、地方都市の例を挙げ、そういったシャッター商店街にこそ「まちプロジェクト」が必要だというコメントもあり、地域密着型の活動の意味を改めて考えさせられました。発言するパネリストたちの真剣な眼差しから、それぞれの活動のさらなる可能性を感じさせるシンポジウムとなりました。(伊藤)

お問い合わせ | TERATOTERA

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 Art Center (Ongoing)

tel: 090-4737-4798 | e-mail: info@teratoterajp.jp | http://teratoterajp.jp | http://twitter.com/teratoterajp

主催 | 東京都、東京文化発信プロジェクト・室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人 TERATOTERA

後援 | 武蔵野市

協力 | 井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺/ウズンブロー、株式会社アトミ「吉祥寺店」、無人島プロジェクト

YUKA TSURUNO, ARAIINURANO, SNOW contemporary, KAYOKOYUKI, TALON GALLERY,

株式会社skylink, 株式会社ビデオインフォメーションセンター



東京文化発信
プロジェクト

TERATOTERA × 東京アートポイント計画

TERAKKO通信

2012
Vol.05-02

ART



NEO公共『ART』

祭り後期を締めくくるNEO公共『ART』は、10月末にアトレ吉祥寺で行われた展示にはじまり、11月には、井の頭恩賜公園の西方に位置する御殿山エリアの林をメイン会場として、9組の気鋭のアーティスト達が今年のテーマ「NEO公共」をそれぞれの視点で読み解き、2日限りの野外展示と2組のパフォーマンスを行いました。また、中には地域参加型の作品もあり多くの来場者を呼びました。

平成24年10月27日[土]・28日[日] 12:00-18:00 | アトレ吉祥寺(花火の広場)

村上慧《家主リレー》

村上慧は、何百を超す人々が行き交う週末のアトレ吉祥寺に、「ノックしてください」と書かれた小さな「家」を設置しました。ノックしてみると、中の紐を持っていないと家が崩れてしまうというので、出てきた家主に紐を渡され自分が新家主となります。

何も知らずに作品を支え始めると、自分の時間を拘束されたまま、次の出逢いを待たなければなりません。流れる街の喧噪の中、この小さな「家」は通りかかった500人以上の足を止め、そこに出逢いを生みました。(高村)



東京アートポイント計画」とは？

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち、活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを旨とし、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bh-project.jp/artpoint>

TERAKO「ラッコ」とは？

TERAKOの活動を企画・運営までアシストするボランティアスタッフです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKOとして活動しています。

和田昌宏 頂戴好極品井之頭園子

太田遼（立入禁止と夏の色）

お問い合わせ | TERAKOTERA

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 (Art Center Ongoing内)

tel:090-4737-4798 | e-mail: info@terakotera.jp | <http://terakotera.jp> | <http://twitter.com/terakotera>

主催 東京都、東京文化発信プロジェクト外・室（公益財団法人東京歴史文化財団）、一般社団法人 TERAKOTERA

後援 武蔵野市

協力 井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺/ウズンブー、株式会社グリン、無人島プロジェクト

YUKA TSURUNO, ARAIINURANO, SNOW contemporary, KAYOKOYUKI, ITALIAN GALLERY,

株式会社shyink、株式会社ビブリアメーションセンター



平成24年11月3日[土]・4日[日] 12:00-18:00

井の頭恩賜公園（御殿山から西園へ続く森、及び西園）

アーティスト | 太田遼、志村信裕、加藤翼、テニスコーツ、橋本聡、原田賢幸

ほうほう堂、山本篤、山本高之、和田昌宏、assistant

井の頭恩賜公園での2日間

今回ARTのメイン会場となったのは、武蔵野の林が残る井の頭公園の奥まった一角でした。

元々公園にある樹木の根を保護するための柵を、そのまま広場の中心にある街燈を囲むように伸長させ、落ち葉に埋もれた公園にそこだけ青々と夏の緑を出現させた太田遼の《立入禁止と夏の色》。樹下の一角に、人が覗き込むのに程よい高さの緑色の鳥小屋を設置し、好奇心から巣穴を覗きこんだ人にだけチラチラと揺れる炎の映像を垣間見させた志村信裕の《Lamp》。広場の片隅に木製の小さな小屋を建て、その裏の地面に排水溝を仕込んで、そこからあふれる水の動きと人の声で、地の底に押し込められた



志村信裕 《Lamp》



東京文化発信
プロジェクト

TERATOTERA × 東京アートポイント計画

TERAKKO通信

2012

Vol.05-03



2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で!

原田賢幸《勇み足と停頓の間は、思いのほか、
または期待外れの。もしくは想像通りの》



assistant「Park Library」



山本篤《はなより》



ような心情を視覚化して見せた原田賢幸《勇み足と停頓の間は、思いのほか。または期待外れの。もしくは想像通りの。》そして、assistantの《Park Library》は、鹿避けのために作られた金網で囲んだ空間を私設図書館に仕立て、作家の選んだ建築関連の蔵書を並べて、訪れた人にその中から好きな一節を朗読してもらいipodに録音するという観客が能動的に関わることで成立するものでした。これらは、一見この自然豊かな公共の空間に溶け込んでしまうかのような作品群ですが、これと逆に、違和感はあるながら、もはや見慣れた景色らしきものとなっていたのは、和田昌宏《頂級好吃極品井之頭団子》のトラック屋台と山本篤《ほころとまい》の祠にあたるビニールシート小屋でした。静かな公園に突如現れた国籍不明の内装に彩られた団子屋台では、和田扮する無口な店主が、派手な装いの外国人アルバイトを介して客から受けた注文で団子を作りはじめるのですが、その調理過程を見守る客とギャラリーからは笑い声と悲鳴が交互にあがっていました。

そして、少し林の奥まった場所に位置するビニールシート小屋では、近くに設けられた祈禱所で観客が願い事を書いて小屋の壁に貼りに行くたび、中から住人が出て来て、大声でどなり、願い事にケチをつけたりして観客を戸惑わせます。この山本が扮する「神主」と称する浮浪者風の小屋の主は、一日4回ボート乗り場のある池の方へ出かけていき、船上で風変わりな獅子舞らしきものを披露していました。

橋本聡が会場で展示したのは立て看板1枚。作家本人は、この場を走りながら他の展示作品についてコメントするなど、週末でにぎわう吉祥寺駅周辺の各所に出没し、街中で様々なパフォーマンスを行いました。

どの作品もNEO公共にふさわしい、ここでしか見られない2日限りの記憶に残る展示となりました。(千葉)

「東京アートプロジェクト計画」は、東京の様々な人・まち、活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bh-project.jp/artpoint>

TERAKKO「アライコ」とは？

TERAKOTERAの活動を企画・運営するボランティアスタッフです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。



〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7(Ar Center Ongoing内)

tel:090-4737-4798 | e-mail: info@terakotera.jp | <http://terakotera.jp> | <http://twitter.com/terakotera>

主催 東京都、東京文化発信プロジェクト・外・公益財団法人東京都歴史文化財団、一般社団法人TERAKOTERA

後援 武蔵野市

協力 井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺・ウズンブロー、株式会社アライ「吉祥寺店」、無人島プロジェクト

YUKA TSURUNO, ARAIINURANO, SNOW contemporary, KANOKOYUKI, TALON GALLERY,

株式会社skywork, 株式会社デコレーションセンター

平成 24 年 11 月 4 日 [日] 13:00-14:30

山本高之《チルドレン・プライド 11.4 in 吉祥寺》

子供たち 12 名が池の周りをデモ行進した《チルドレン・プライド》は、アーティスト山本高之の授業から始まりました。「こうなって欲しいと思う事をあげてみよう」と子供たちへ問いかけます。「ペンギンとネコとくらしたい」「スポーツカーがほしい」など出てきた言葉でプラカードを作ります。字が書けない子も文字の見本を見て一生懸命書くなど、つたないながらもそれぞれ思いの詰まったプラカードが出来上がりました。次はプラカードに書いた言葉を声に出す練習です。ここで恥ずかしがる子から声を引き出すのに山本が本領を発揮、30 分の練習で最後は見違える程に声がでるようになっていました。いよいよデモ行進の実践です。多くの人がいる中、子供たちは堂々と声を張り上げ、大人に頼ることなく 30 分程のデモ行進をやり遂げたので、見守る大人の感慨もひとしお、井の頭公園に遊びにきていた人たちの注目を集めました。(東)



東京文化発信
プロジェクト

TERATOTERA × 東京アートポイント計画

TERAKKO通信

2012

Vol.05-04



2020年
オリンピック・
パラリンピックを
日本で!



平成 24 年 11 月 3 日 [土] 引き興し 15:00-・4 日 [日] 引き倒し 15:00-

加藤翼《いせやCALLING》

アーティスト加藤翼が国内外で展開している巨大建造物をみんなでロープで引っ張る「引き興し」。今回は吉祥寺を舞台とするにあたり、地元の人に惜しまれながらも改築のため2012年7月に解体された吉祥寺の焼き鳥屋“いせや公園店”の廃材を譲り受け、実物大の店を1週間かけて井の頭公園に再現しました。そして迎えた本番当日、寝かせた状態の店を加藤のかけ声に合わせて約300人が力を合わせて見事に引き興しに成功。次の日に引き倒しました。

制作期間中に作家に話しかけた公園利用者、当日に偶然通りがかった人を含め多くの参加者が一丸となってロープを引くことで、普段まったく関わりのない人たちとの新しい繋がりが生まれました。(伊藤)

東京アートポイント計画とは？

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートと結び、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bn-project.jp/artpoint>

TERAKKO「ラッコ」とは？

TERATOTERAの活動を本画から運営までアシストするボランティアスタッフです。
年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

Performance

お問い合わせ | TERATOTERA

〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 (Art Center Ongoing内)

tel:090-4737-4798 | e-mail: info@teratoterajp | <http://teratoterajp> | <http://twitter.com/teratoterajp>

主催 東京都「東京文化発信プロジェクト」外・室（公益財団法人東京歴史文化財団）、一般社団法人TERATOTERA

後援 武蔵野市

協力 井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺「ワスリグラー」株式会社「グリン」吉祥寺店、無人島プロジェクト

YUKA TSURUNO, ARAIINUNRANO, SNOW contemporary, KAYOKOKUYUKI, TALON GALLERY,

株式会社skylink、株式会社ビデオプロジェクトセンター



平成 24年11月4日 [日] 16:00-

テニスコート、ほうほう堂《クローージングスペシャルパフォーマンス》

いせや引き倒しが終わった西園グラウンドに夕日が差し始める頃、倒れたいせやの瓦礫を取り囲むようにテニスコートの音楽とほうほう堂のダンスパフォーマンスが始まりました。広いグラウンドに聴こえる歌声、ギター、解体作業の音。集まった沢山の人は祭りの終わりを惜むように聴きいていました。そのうちパフォーマンスは観衆を引き連れて公園の林の中へ。通りがかりのお爺さんやお客さんを巻き込むほうほう堂のダンスとテニスコートの心に響くメロディが暗くなった公園に一体感が生まれ、観衆の暖かい拍手がTERATOTERA祭りを締めくくりました。(遠山)



NEO公共『シンポジウム—新しい公共へ—』

平成 24 年 10 月 31 日 [水] 19:00-21:00 | 武蔵野商工会館 4F ゼロワンホール
パネリスト=伊東豊雄、川俣正 司会=小川希

TERATOTERA 祭り 2012 のメインテーマは「NEO 公共」。東日本大震災後、「公共」という概念が、公共的なサービス享受するものから、市民が能動的に関わって築くものになったのではないかと、という問いかけです。それを受けて、被災地の人々が集う場として「みんなの家」を手がける建築家伊東豊雄さんと、公共的な空間に構造物を組み上げるアーティスト川俣正さんが、10 月 31 日に吉祥寺で語り合いました。小川希 TERATOTERA 総合ディレクターの司会で、新しい「公共」のあり方を探るクリエイター同士の共感あふれるトークに、満員の聴衆は熱心に聴き入っていました。

伊東さんは震災後まもなく、4 人の建築家とともに「帰心の会」を結成しました。「住む人と作る人、ボランティアがみんなで考えて作ろう」と考えたからです。そこから始まったのが「みんなの家」。「被災地の人たちが集まって食事ができて話ができる、くつろげる場所を、自分たちで資金を集めて提供する」プロジェクトです。2013 年 1 月までに 6 棟が完成しています。

一方、川俣さんは 2010 年から東京都と共に、隅田川沿いに塔を立てるプロジェクト「東京インプログレス」を手がけている中で、震災に遭遇。被災地に入って「野外にテーブルやベンチを作ったら、仮設住宅から人々が集まってきて、臨時的『みんなの家』ができた」。その経験から、「関東大震災のがれきが埋まっている東京・豊洲に、東京の家屋の廃材で『豊洲ドーム』を作りました」。



伊東豊雄 (いとう・とよお)

1941 年生まれ。伊東豊雄建築設計事務所代表。「せんだいメディアテーク」(2001 年開館) など柔らかく、応用可能な空間の作り方を提案する。2012 年ベネチア・ビエンナーレ国際建築展では日本館のコミッショナーを務め、被災地で手がける「みんなの家」プロジェクトの設計過程を展示し、金獅子賞を受賞した。



川俣正 (かわまた・ただし)

1953 年生まれ。フランス国立高等美術学校教授。美術と社会の関わりを問い、現地で制作するプロジェクト「ワーク・イン・プログレス」を国内外で続ける。東京では 2010 年から隅田川沿いに塔や物見台を建設。3 作目の「豊洲ドーム」が 2012 年 10 月に完成した。

「みんなの家」について伊東さんは「(被災地は) ある意味で最も悲惨な状況ですが、だからこそ心が通い合う。逆に言えば建築家としてはユートピアのような状況がそこにある。みんなで一緒に考えてみたいと思った」と明かします。背景には、与えられた条件でコンペティションをして作られる、従来の公共建築のあり方への疑問があったといえます。これに対して、川俣さんは、「復興のために『みんなで何かをする』ことが、ある種の倫理になっている」との懸念を表明。公共的な空間で現地の人々と関わりながら制作を続けてきた表現者として「人はわかりあえない。それが基本。そのうえでセンシティブな距離感を持つことが求められているのでは」と指摘します。

伊東さんは、被災地での建築家の活動が「ありがた迷惑に近い感覚で受け止められている」場合もあると認めつつ、「こういう時だからこそ心は開かれている。そこから何かが生まれる」。一例として、津波で失われた民家を、残った基礎部分の調査と住人の記憶を元に図面を書き、立体に起こした、東北大学の学生の卒業設計を紹介しました。

川俣さんは、伊東さんの期待感に同意しつつも、「こういう時期だから扇情的な動きやナショナリスティックな機運も出てくる」。

そう語る川俣さんに、小川ディレクターは、公共的な空間で制作するうえで「アートの役割はどこにあると考えますか」と問いかけます。

「それを見る人たちがどこかで感じ取ればいい」というのが川俣さんの答え。「僕はコーディネーターとして、日時と場所を決めて、そこに人を集めて何を作るかを話し合う。そうすると、個人を超えたものができあがり、地元の人たちもつながっていく」

伊東さんも「建築は否応なくいろんな人が関わる。その人たちによって自分が考えていたことから変わっていった方がいい建築になる」と応じます。「『みんなの家』なら、みんなで一緒に考えて作れるから、川俣さんの仕事と近いことができる」。

このあたりで、二人の「公共」を巡るベクトルがクロスした印象です。川俣さんが「僕の場合は、アシスタントやボランティアが暴走して勝手に増築していくことで、作品は無署名になって作家はいらなくなる。建築でも、建築家のいない建築になっていくのでは」と投げかけると、伊東さんも「そうならなければいけないと思う。昔の日本の民家の美しさには現代の建築はかなわない。建築をデザインするより、そのプロセスをデザインする方が面白いと思い始めています」。

最後に小川ディレクターが「お二人とも近代的な考え方をどう超えていかを、建築とアートの世界でやってこられた。奇しくも震災というきっかけがあって、それが明確になってきたという印象を受けました」と語って、新しい「公共」への期待とともにシンポジウムの幕を閉じました。

(西岡)



作家インタビュー | 山本篤

「NEO 公共」という刺激的なテーマに引き寄せられるように生まれた作品を、まだ自分の中でも消化しきれずにいます。私が用意した作品の構造は「嘘」ばかりでした。しかし、作品として動き続けた井の頭公園での時間には、確かに「本当のこと」があったのではないかと思います。きっと、あの作品を一番楽しんだのは自分なのでしょう。作品を成立させてくれた、スタッフの皆さま、そして参加者の皆さま本当にありがとうございました。

来場者インタビュー

NEO 公共『まちプロ会議』 | 三鷹在住女性

全然知らないことだらけでした。私は吉祥寺にずっと暮らしているので、西荻とか高円寺の活動など全然知らなかったですし、TERATOTERAも今回初めて知ったので、そういう意味ですごく新鮮でした。私がやりたいと思っていたことをもうすでにやっていらっしゃる方がいたこともすごく衝撃で、あとに続けたいという気になりました。

NEO 公共『シンポジウム—新しい公共へ—』 | 中央線沿線在住男性

僕も大学では建築をやっていて、今、作家活動をしているので、今回のテーマとゲストはとても興味深かったです。震災に対する建築家の仕事という直接の反応と、あと川俣さんが被災地支援をみんなで一緒にはやらないという意見があったので、そこから拮抗して話が深まっていく話をもう少し聞きたかったです。場との関わり方というのは、建築家とか作家ではそれぞれ感覚、目線、やり方も違うので、そういう面もみてみたかったです。

TERAKKO 森聡史

今年初めてTERATOTERAのイベントに関わらせていただきました。以前より美術に興味はありましたが、実際に作家がボランティアスタッフとともに作品を作り上げていく過程を目の当たりにし、非常に嬉しく、なんとも不思議な気分になりました。美術作品とは、傍から見てみると、「なにやら神聖なものを特殊な人たちが作っている」といった漠然とした印象を持っていましたが、そんなアンタッチャブルな存在が非常に身近に感じられるようになったからです。ここでは作品と作家、鑑賞者、ボランティアスタッフの間に壁は全く存在していませんでした。美術館で作品から感じられる新しい気づきや驚き、神聖さを生活の中に溶け込ませる、そんなTERATOTERAの活動に今後も関わっていきたいと感じています。

東京アート・ボーン計画とは？
「東京アート・ボーン計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京歴史文化財団が展開している事業です。 <http://www.bh-project.jp/artport>
TERAKKO (テラッコ) とは？
TERATOTERAの活動を企画する運営スタッフを務めるボランティアスタッフです。年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

お問い合わせ | TERATOTERA
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 (Art Center Ongakuji)
tel: 090-4737-4798 | e-mail: info@teratoterajp.jp | <http://teratoterajp.jp> | <http://twitter.com/teratoterajp>
主催 | 東京都、東京文化発信プロジェクト(公益財団法人東京歴史文化財団)、一般社団法人 TERATOTERA
後援 | 武蔵野市
協力 | 井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺バスステーション、株式会社アール・吉祥寺店、無人島プロジェクト、YUKA TSURINO, ARAIJIUNIRANG, SNOW contemporary, KAYOKOYUKI, TALION GALLERY, 株式会社skylink, 株式会社デジタルメディアセンター



TERATOTERA WEST 途中下車の旅 14@武蔵境

バスのなかのひみつ

～子どもだけに訪れる不思議な出会い～

アーティスト | 遠藤一郎・松本力

平成24年12月13日(木)～12月24日(月・祝) | 武蔵野プレイス

- ・「未来へ号」バス内の展示 | 12月13日(木)～12月20日(木)
- ・ライブパフォーマンス | 「バスの中の大人も! ひみつ」12月19日(水)
- ・ギャラリー展示 | 12月18日(火)～12月24日(月・祝)
- ・ギャラリートーク | 12月24日(月・祝)

TEARAKKO 武蔵境チーム | 宮久、田中、大内、永野、野澤、藤岡、横井、木俣、奈良田

2012年最後となったイベントは、「バスのなかのひみつ～子どもだけに訪れる不思議な出会い～」。アーティストの松本力さん、遠藤一郎さんを迎え、12月13日から11日間、武蔵境にある「武蔵野プレイス」にて開催しました。子どもたちだけが入ることのできる『未来へ号』内でのワークショップや展示、その他ライブパフォーマンスやギャラリートークなどを行い、会期中はこの場所を偶然訪れた人たちにも見ていただくことができました。

2012 vol.07



バスのなかのひみつ ～子どもだけに訪れる不思議な出会い～

2012年最後となったイベントは、「バスのなかのひみつ～子どもだけに訪れる不思議な出会い～」。アーティストの松本力さん、遠藤一郎さんを迎え、12月13日から11日間、武蔵境にある「武蔵野プレイス」にて開催しました。子どもたちだけが入ることのできる『未来へ号』内でのワークショップや展示、その他ライブパフォーマンスやギャラリートークなどを行い、会期中はこの場所を偶然訪れた人たちにも見ていただくことができました。

今回のイベントは、会場である武蔵野プレイスと、TERATOTERAの共同開催で行われました。武蔵野プレイスは2011年設立の、図書館機能を中心に様々な機能を持った複合施設です。本を借りだけでなく、館内のカフェでパンケーキを食べたり、スタジオでダンスの練習をしたり、講座で新しい事を学んだり、毎日様々な目的で多くの市民が訪れる場となっています。そこで今回紹介するのは、二人のアーティスト。「未来へ」というストレートなメッセージを掲げ、日本全国を「未来へ号」と称した車で駆け巡る遠藤一郎と、手書きによるアニメーション制作や、子どもたちとのワークショップを展開する松本力です。二人で合同展を開催するのは本企画が初の試みとなります。

会期前半の12月13日-20日、武蔵野プレイス前の広場には遠藤一郎の「未来へ号」バスが停車していました。街行く人も立ち止まってしまう程、真っ白な図書館をバックに黄色い車体が目立ちます。中には子ども(20歳未満)だけが入ることができました。入り口ではパスポートが手渡され、そこでアーティストの松本力が問いかけます。「君は、どんな人ですか? バスの中で見て感じた事を絵にしてください」。恐る恐るバスに入っていく子や、待ちきれず駆け込んで来る子、友達を誘って遊びに来る子。350人以上の子どもたちがバスにやってきて、この間に答える形で、「未来へ号」の中で自由に絵を描いてくれました。バスの中で満足いくまで色々なペンで塗り足したり、くつろいだりする子どもに、一緒に来たおかあさんが入り口から「もう帰ろうよ～」と声をかける光景が夕方になるとしばしば見られました。会期後半の12月18日-24日まで、ギャラリーでは、「未来へ号」の中で子どもたちが描いた絵をもとにして、松本がアニメーションに続けていきました。カラフルなてくてく坊主、たくさんの車、跳び箱をジャンプしているところ……。伸びやかな線を松本のカメラが縦横無尽に追っていきます。絵が生き生きと動き出すところを見て、子どもたちは大はしゃぎ。私たち大人にとっても、子どもたちのまなざしは、私たちが子どもの頃好きだった事やその光景が、時代を超えて普遍的なものであることを教えてくれます。また、アニメーションの他に、松本やテラッコ(TERATOTERAのボランティアスタッフ)たちが子どもの頃好きだったことについてもう一度向き合ってみた映像作品もあわせて展示しました。



会期中1日だけバスの中に大人も入れるスペシャルデーとして、「未来へ号」バスの中でアーティストVOQによるライブ演奏と松本力のVJによるライブパフォーマンスを開催しました。真冬のしんと冷えた夜、黄色いバスの中に大人たちが続々と乗りこんでいきます。助手席のVOQがギターを奏でライブが始まりました。軽やかな歌声に合わせて、参加者が描いた「自分が好きなもの」が松本の手により繋がって一つのアニメーションになり、「未来へ号」のフロントガラスに次々と映し出されます。まるでバスで未来への時間旅行をしているかのような楽しいひと時でした。一方の遠藤一郎は、ギャラリーで「未来へ号」で日本縦断するプロジェクト「RAINBOW JAPAN」の活動を紹介。バスの軌跡ラインを地図上に記録することで大きなメッセージを描きました。それは日本列島に住み、生きている私たちが皆で明日に向かって踏み出すための一歩の掛け声「いっせーのーせ!」。加えて会期中、ギャラリー以外にも遠藤の賑やかな作品が展示されました。館内の1階から3階までを貫く吹抜けいっぱいに展示した垂れ幕と入り口両脇の横断幕。大きな文字で書かれた「わっはっはっは」と「えーんえーん」が静かな館内で感情をいっぱいに表現していました。

そしてついに迎えた最終日。クリスマスイブの朝、武蔵野プレイスに再び「未来へ号」バスがやってきました。中から現れたのは、サンタ服に身を包んだ遠藤とアーティスト鈴木彩花。しかし、頭にはなぜかハゲズラを被っています。ハゲズラを被って世界中の人と交流するパフォーマンス「HAGEZURA SAVE THE EARTH」の始まりです。冬の青空の下、子どもと白い息を弾ませながら追いかけてこたり、皆でハゲズラを被って記念撮影をしたり。色々な人の頭を通ったハゲズラを被ると、格好つけてもしょうがない!被った人も周りの人も、ハゲズラだけに眩しい笑顔になってしまいます。午後からギャラリーで開かれた遠藤×松本のアーティストトークでは、松本もサンタ服で登場しクリスマスムード満点。二人のサンタが今回の合同展や、今アートの出来ることについて語り合いました。年末の武蔵野プレイスに現れた二人のアーティストが発する未来への明るいメッセージが来館者を笑顔にし、イベントは賑やかに閉幕となったのでした。

(TERAKKO 武蔵境チーム 宮久実那)



武蔵野プレイス 担当者

武蔵野プレイスは図書館・生涯学習支援・市民活動支援・青少年活動支援の機能を併せ持ち、横断的な活動やネットワークが自然と生まれる「場」を提供していき施設です。今回は、「プレイスフェスタ2012」という、ここに来れば何かがあるという「ワクワク感」を皆様にお届けしようと、開館以来初めて開催した全館挙げてのイベントの一環でした。今回の企画をアーティストやTERATOTERAのみさんと共に進めるなかで、これまで武蔵野プレイスやアートに関わりの薄かった方の目にも留まり、充実したイベントとなり、武蔵野プレイスの今後に向けていい刺激となりました。今後同様の企画を行うにあたっては、できあがった作品の展示だけでなく、制作風景の公開などアーティストと触れ合う機会をもっと設けると、より多くの方々に楽しんでもらえるかもしれませんね。今回はイベントに彩を与えていただき、誠にありがとうございました。

ライブに参加した田無在住の50代男性

このイベントは武蔵野市の知り合いの人から市報に面白そうなのが載ってるよって聞いたんですね。それで内容をみたら「ひみつ」ってことで、わからないじゃんなんだろなという好奇心で、ありきたりのライブじゃない変わったものが見れるんじゃないかなと思って来ました。最初バスに入ったとき、昔のテント芝居や夜祭みたいな懐かしい感覚を覚えましたね。劇場にこだわらず、こういうバスとかの中でやる方法もあるんだな、いいな。劇場でやるより面白いかなんて思いました。よく昔は結構ライブなんかでも、野外コンサートだとかあったような気がするんですよね。最近そういうのが少なくなって、いい建物のなかでやるサイドが増えているような気がして……。見ている人と密着できるようなものを見たいなと丁度思っていた時で、良かったです。よく会場で照明や音響をバンバンたいて立派なのをやるけれど、盆踊りのなものが減ってきているじゃないですか。でもそういうものも面白いな。ちょっとアニメの繰り返しに飽きてきた部分も多少あったんですけど、発想が面白かったです。

ライブに参加した武蔵境在住の20代の女性

館内チラシを見て不思議なイベントがあるなと思って参加しました。最寄り駅が武蔵境なので、仕事帰りによく寄るんです。私は全然アートとは関係ない生活をしているので、今日は非日常的な感じがして面白かったです。イラストは海を描いたつもりなんですけど思ったより描けなくて……。でも映像になってみると雰囲気は全く違って、そこに自分のタッチのクセもあって。ただの絵なのに一つのアニメーションになった時にすごく世界観があって面白かったです。TERATOTERAの活動も知らなかったのも、もっと見てみたいと思います。

ギャラリートークに参加した20代女性

トークを聞いて思ったことは、遠藤さんのバスには「未来へ向かって」というメッセージがあり、松本さんの映像の展示は「未来から」という役割分担でできた点良かったと思います。また、松本さんの映像作品については、子どもたちが自分の心の中を絵にして、その絵のことを声に出して話していて、素直な言葉を紡ぎ出している感じがしました。いろんな子供が来て、いろんな声を映像化していて、武蔵野プレイスらしさが感じられました。

テラッコ感想 | TERAKKO 武蔵境チーム永野悦子

遠藤一郎さんと松本力さんというそれぞれに個性を持ったアーティストと、今までの「図書館」のイメージを覆すような新しいコンセプトを持った武蔵野プレイス。3者の個性を生かしながら、融合させ、一つのイベントに作り上げようとする試みは非常にチャレンジングであり、「これは絶対に面白くなる!」と確信を持ちながらも、本当に完成するのか…との不安と常に隣り合わせでした。しかし、当日ボランティアを含め、このイベント立ち上げに協力いただいたみなさん、そして何よりもイベントへ訪れた何百人ものお客様のおかげで、なんとかゴールまで走りきることができました。遊びに来てくれた、たくさんの子供たちの笑顔は今でも心に強く残っています。皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいです。企画、運営については見直すべきところもありますが、次につなげていくことができたいと思います。

遠藤一郎

1979年静岡県生まれ。未来芸術家。車体に大きく「未来へ」と描かれた、各地で出会った人々がそのまわりに夢を書いていく「未来へ号」で車上生活をしながら全国各地を走り、「GO FOR FUTURE」のメッセージを発信し続ける。アートイベントで展示やパフォーマンスを行うほか、現在、鳳あげプロジェクト「未来龍大空風」を各地で開催。2012年から、日本列島にメッセージを描くプロジェクト「RAINBOW JAPAN」を立ち上げ、日本列島を縦断、日本全体を勇気づけるメッセージを描く。
<http://www.goforfuture.com>

松本力

1967年東京都生まれ。在住。アーティスト。1991年多摩美術大学美術学部GD専攻卒業。一コマずつのドローイングに透過光を加え撮影するアニメーションで、絵による映像表現を目指す。国内外での展示の他、音楽家「オルガノラウンジ」や「VOQ」とのライブで、映像と音楽の空間表現を行う。また、手製映像装置「絵巻物マシーン」シリーズを用いたワークショップを商店街や病院、学校などで子どもたちと積極的に実施している。
<http://chikara.p1.bindsite.jp/>

東京アートサイン計画とは？
「東京アートサイン計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参加により創造・発信することを目的、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。
<http://www.bh-project.jp/artpoint>
TERAKKO(テラッコ)とは？
TERATOTERAの活動を企画・運営するアーティストのグループとして活動しています。
年齢も幅広く、さまざまな背景のメンバーがTERAKKOとして活動しています。

お問い合わせ | TERATOTERA
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7 Art Center (Ongoing)
tel. 090-4733-4798 | e-mail: info@teratoterajp.jp | <http://teratoterajp.jp> | <http://twitter.com/teratoterajp>
主催 | 東京都、東京文化発信プロジェクト(公益財団法人東京都歴史文化財団)、
一般社団法人TERATOTERA、公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団
協力 | 株式会社skylink、株式会社ラジオインフォメーションセンター、アライバジヤン株式会社

テラッコたちの熱量

「テラッコ主導」という方針が掲げられた2012年度、それぞれの経験やノウハウを活かしながら、企画を提案するテラッコや運営業務を積極的に担うテラッコたちが協力しあい、テラッコたちの手でゼロから企画が作り上げられた。

テラトテラには、バックグラウンドも参加の動機もさまざまな多くのテラッコが集まっている。熱心に活動するテラッコたちの姿に、自分もテラッコの一人ながら、彼らの熱意はいったいどこからくるのだろうといつも不思議に思う。普段は社会人や学生として過ごすテラッコたちにとって、テラトテラの活動に参加できる時間は限られているため、もちろん苦労や葛藤も多いはずだ。それでも、テラッコそれぞれがテラトテラを通じて、〈普段の生活では得難いもの〉たとえば、テラトテラの活動を越えて継続する人間関係や、表現の生まれる現場へ立ちあえることの面白さ、そして、〈人々にアートを提供することに対するやりがいや達成感〉を得るために活動を続けている。テラトテラの組織的な運営の在り方もまた、テラトテラが活動を継続する中で、単に業務をこなすだけではなく、企画や運営に携わるテラッコたち自身も楽しみながら活動できるようにと、模索しつつかたちを変えてきたものだ。

テラトテラというプロジェクトも、テラッコひとりひとりも、その活動の意義を模索しながら試行錯誤で走り続けている。今年度の企画には、さまざまな人々が行き交う屋外の公共空間で展開されたものが目立つ。アートを前提しない人々の目に触れる場所でアーティストの表現を展開させていくために、テラッコたちはアーティストと協働し、共謀し、そして、アーティストの表現が人々を巻き込んでいく状況を経験した。

人々は必ずしもアートを好意的に受け入れるとは限らない。アーティストの表現を「アート」として受け入れられなかった人々にとってそれは逸脱として排除の対象となり、クレームや通報も受ける。このように人々との間に不調和も生まれている一方、ひとたびそれが「アート」として説明されると、その逸脱も不調和も、そういうものとして受け入れられてしまう。そして、それ以上深くは問われない。この状況を問うこともこれからのテラッコの役割の一つかもしれない。

テラッコは、自らの表現によって人々の日常に入り込んでいくアーティストの共犯者であるとともに、その「侵犯」のもっとも間近な目撃者だ。アーティストがつくりだす予定不調和な状況に巻き込まれてしまった人々と同じく、テラッコもまた、この状況に巻き込まれ引き込まれてしまっているからこそ、熱に浮かされ突き動かされてしまうのかもしれないと思う。もちろん、自分も含めて。

(TERAKKO 加藤惟)

P. S. テラッコさま

アートボランティアという言葉さえ知らなかった。

TERATOTERA～密着型アートプロジェクトってどんな？という興味からテラッコになってみたら、いるいる腫を輝かせた若い子たちが彼らを惹きつける「現代アート」とは何物なのか？これは一度体験してみっか、と思ったのが運の尽き(付き!)。3ラウンドも付き合ってしまった。

企画から交渉、広報、運営と、プロジェクトに関わる全てをテラッコ達が担う。将来アートの世界で生きたい者も、スキルを活かす為参加する人も、アーティストのファンもテラッコという細胞の一つとなって真剣に取り組む。一度のイベントの中で、前から横から斜めからと、あらゆる角度の出会いが生まれ、それは刺激となり栄養となってテラッコをみるみる成長させる。それぞれ仕事を持ちながら、又は学業と両立しながらの作業は容易ではないと思う。けれど彼らは寝る間を惜しんでひたむきに進む。それも嬉々として。

アーティストの想いを伝える為にどうしても譲れない戦いがあり、孤独な作業の陰に何本ものサポートする手の存在があり、時には恋の鞘当てがあったりして！何て素敵なテラッコ達。これだからテラッコはやめられない。

現代アートは、怖い程の存在感を持ちながらもその姿を簡単には見せてくれない怪物。それを追い求めるアーティスト。その表現に一度でも魅了された者は、縫い針一本程でも良いからとサポートに身も心も投げ出す。

一方、地域密着についてはまだまだ課題がある。地域は総じて保守的で、信頼を得るには継続というキーワードが不可欠だ。中央線沿線という既に確固たる「文化」を構築している地域で新たに何かをしようとするには、時間とエネルギーを要する。ただし、今年度の「TERATOTERA」のイベントの中で、いくつかの街のプロジェクトにおいては確実に始めの一步を記せた気がする。実際、街なかで「今年もTERATOTERA祭りってやんのかな」という言葉を耳にして小さくガッツポーズをしたものだ。地域に何をもちたらすか？先ずはそこから出発しなくてはならないと思っている。文化の飽和地帯での文化発信はアートを媒体にするのが好ましい。アートは誰かを(何かを)攻撃しないと信じられているし、誰も見た事も聞いた事もない何かが生まれる可能性があるから。

さて、あらためて振り返れば現在テラッコの中には大人が存在が確実に増えていて、人脈や経験の分野でテラッコを厚みのあるものにしている。バランスの良い構成が「TERATOTERA」を更に魅力的にしていると感じる。そして、自由に羽ばたくテラッコを暖かく(時に厳しく)見守るディレクター小川さんの存在無しにはこのプロジェクトは語れない。

その才能とは、アートプロジェクトの未来を具現化する術をテラッコ達に無言の内に指し示している所だと思う。いや、文句なくやばくてナイスな人物だ。

こうして天才ディレクター小川さんと我々がテラッコ達で中央線沿線をアートで飾った一年が終わった。遠く宇宙の彼方、月面に残された小さな一步と同じ重さを持って次の一年へと向かう心の準備は出来ている。

待ってろ、テラトテラ～！

航海を終えて

活動範囲をこれまでの高円寺―吉祥寺から更に西の国分寺まで伸長し、吉祥寺を境に中央線の東西を行きつ戻りつ展開された平成24年度のTERATOTERA。範囲が広がったことで、駅ごとに異なる地域のカラーや文化の違いもくっきりと浮かび上がってきました。

そして、今回からこのテラッコたちによる自主企画も始動。何から何まで初めてのことで、実際にこぎつけるまでの過程でも当日蓋を開けてからも、様々なハプニングに見舞われながらの初航海、小川船長やたこ航海士に導かれつつ、時にはゲストや参加したアーティスト、行く先々の港で出会う地域の方々の視点を借りて新たな発見をし、その手に支えられながら、未曾有の航海に乗り出したのです。

私自身は、テラッコとして誰かの立ち上げた企画を一步引いて見守り、すっかり準備の整った現場に助っ人として顔を出すような関わり方が多かったのですが、テラッコ屋と呼ばれる月に一度の週末ミーティングで、各企画の進捗を記録し、自主企画に取り組むテラッコたちの奮闘ぶりを聞かされるうちに、なんだかじっとしてられない気分になりました。

やがて、人手が足りないからと呼ばれた作品制作の現場で、次々と自分の用事を切り上げて集まってくるテラッコたちの姿を目にしたり、炎天下のプールで何時間も水に飛び込む撮影で芯まで冷え切ったテラッコたちにアイスを差入れ、その場の空気を一気に凍らせてしまったりもしたのですが、とにかく、現場では飛び込んだ本人たちしか知りえない事態が日々発生していたのです。今回すべての航海を終えたあとの報告会で、そうやって一步踏み込んだからこそ見えてきた課題や成果がいくつも具体的にあげられ、それに対する解決策もまたしっかりとイメージされていたことが、課題を並べる一方だった前年度とは大きな違いでした。

そして、もう一つの課題であった地域連携については、まだまだ十分とはいえませんが、イベントの場所探で地元の商店とそこに集まる住民の方々と言葉を交わす中で、スポッ特的ではありませんが、ささやかな交流も生まれているようです。

他所から来たものにとって、住んでいる土地に対する愛着というのは、その場で生じる人との関係性に深く根ざしているように思います。だからこそ、中央線沿線に集まってくるテラッコたちとよそ者の視点で街を歩き回り、そこで何か事を起こす瞬間にわずかでも立ち会えたことは、個人的にとっても新鮮で幸せな体験でした。

今回イベントの会場となった店舗や公共施設、来場者の方々、ただ地元で面白そうな事をやっているということだけで意気を感じて快くポスターを貼り出して下さった店主の方も含め、それぞれから直に受け取る反応や言葉によって、ほんの少しその地域と住人、集まる人々への敬意と愛着を深められたような気がしています。

(TERAKKO 千葉佐奈子)

